

在日中国人女性のライフスタイルと就労意識

——日本人配偶者を持つ中国人高学歴女性を事例として——

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

学校教育学専攻博士後期課程

鄧 婉瑩

1. 目的

この報告の目的は、事例研究を通じて日本人配偶者を持つ在日中国人高学歴女性のライフスタイルと就労意識について考察することである。2000年代に入ると、中国の急激な経済発展に伴い、留学、キャリアアップなど人生設計の一環として、主体的に越境し、日本人男性との結婚により日本社会や日本人家族の中に入り、そこでのジェンダー構造や権力関係という多重の制約を受けながらも、自立の道を探る高学歴中国人女性が増えるようになった。彼女らは従来の経済格差を背景として渡日した「農村花嫁」や、「研修生」、「技能実習生」など単純労働に従事する外国人女性労働者とは異なるタイプの女性である。しかし、そのような在日中国人女性像は学術的研究分野でも日本の新聞記事でもほとんど描かれていない。

2. 方法

調査は2016年10月から11月にかけて機縁法で募った対象者5人に対して、それぞれに1回、約3時間の半構造化インタビューを行った。使用言語は日本語と中国語である。

3. 結果

対象者たちに対するインタビューでは、国際結婚を選択する過程、夫婦関係、移住して以来就労に関わる体験、子供への教育と将来の展望などを聞いた。語り分析の結果、送り出し側の現代中国社会で形成された女性の就労意識は移住を経ても維持されたが、滞日年数の推移につれて変容しつつあることが確認できた。

4. 結論

今回の対象者たちからは、「外国人」しかも「女性」という二重制約の下におかれ、高学歴であっても自分が理想とする仕事に従事し難いという状況が見える。また中国人・日本人家族から育児・家事への協力をほとんど得られなかった対象者たちは、家事とキャリアの両立は難しいという現実を認識している。多少の挫折感があるにもかかわらず、彼女らは姿勢を柔軟にして心理状態を調整し、家族のニーズに応えながら、自分なりのやり方と戦略を持ち望む方向へ進む姿を示していた。このような過程において対象者たちは、日本では女性の社会進出より家事・育児が重視されていることを再認識し、来日前に中国社会で形成されていた就労意識を柔軟に変化させていることを明らかにする。